岩手県立大学社会福祉学部紀要　第 25 巻（2023.3）47 － 57

中学生はなぜ登校し続けるのか
－登校回避感情が生じてから登校／欠席までの心理過程－

上柿　真子[1]・細越　久美子[2]

Why do students continue to attend junior high school?
― Psychological process after having school attendance avoidance feelings ―

UEGAKI Mako[1] , HOSOGOE Kumiko[2]

本研究は、中学生が登校回避感情を抱いてもなお登校し続けるのにはどのような理由や背景があるのか明らかにすることを目的とした。研究Ⅰでは大学生を対象に中学生時代を回顧してもらう形で質問紙調査を実施し、登校 / 欠席行動の背景要因として登校規範や欠席することで生じる不安や懸念があることが明らかとなった。研究Ⅱでは大学生を対象に面接調査を行い、中学生時代に登校回避感情が生じてから登校 / 欠席するまでのエピソードを分析した。その結果、登校回避感情が生じた時に欠席経験がある人は自身のもつ判断基準に基づいて登校 / 欠席を判断し、登校回避感情が生じても欠席経験のない人は登校規範意識が高いことが明らかとなった。
キーワード：中学生、不登校，登校回避感情、登校規範意識

The purpose of this study is to clarify the reasons and backgrounds behind why junior high school students continue to attend school despite their feelings of avoidance. In Study I, we conducted a questionnaire survey asking university students to recall their junior high school days. School attendance norms, anxiety and concerns due to absences were found to be background factors for school attendance/absence behaviors. In Study II, we conducted an interview survey with university students to analyze their episodes from the time they started having school attendance avoidance feelings in junior high school until they decided whether or not to attend school. The results revealed that those who had been absent from school when avoidance feelings arose made school attendance/absence decisions based on their own criteria, while those who had never been absent from school had a high awareness of school attendance norms.
Keywords: junior high school students, truancy, school avoidance feelings, school attendance norm awareness

Ⅰ．背景と目的
１．増加し続ける中学生の不登校と登校回避感情

不登校生徒数は年々増加している。かつて日本においては、登校することは当然であり、特に明確な理由がないまま学校を欠席するのは、その生徒や家庭環境に何らかの問題があるとみなされる傾向があった（本間 , 2000）。しかし、1992 年の文部省学校不適応対策調査研究協力者会議において、登校拒否は「どの子にも起こりうる現象」とされたことをきっかけに、登校できない理由を本人や家庭の問題に帰属させる風潮は弱まり、「不登校に至る背景や理由は多様で、本人や家庭､学校等に関する様々な要因が重なりあっている」（中澤・星山 , 2019）と捉えられるようになってきた。

不登校はどの学校段階でも生じうるが、中でも義務教育の最終段階である中学校での不登校は、その後の進路への影響も大きく、対応すべき課題として注目されている。中学生が位置する青年前期では、親や教員への心理的依存から抜け出して心理的離乳を果たし、自分自身の判断基準により思考し行動するようになる。その一方で自我に目覚めるがゆえに自分の欠点に

[1]岩手県スクールカウンセラー　[2]岩手県立大学社会福祉学部

Table 1　中学生の登校理由の分類

カテゴリ		登校への動機づけ尺度※（五十嵐・茅野，2018）	登校理由（本間，2000）	登校促進動機（撫尾・加藤，2011）	登校理由（櫻井，2011）
積極的理由	学校魅力	同一化的理由 内発化的理由	学校魅力	学校魅力	学校魅力
消極的理由	規範意識	取り入れ的理由	習慣・自己基準	将来展望・義務感	自己基準
	外的圧力	外的理由	親圧力	親の圧力	外的圧力
	学習進度への不安	同一化的理由	自己基準	将来展望・義務感	自己基準
	周囲の反応への不安	同一化的理由	-	-	-

※五十嵐・茅野（2018）では小中学生を対象とした調査の分析結果に基づくが、学校段階別の分析でも同様の主成分が抽出されている。

気づいたり、友人との比較において劣等感を持ち、自己嫌悪に陥るといった、精神的に非常に揺れ動きやすくアンバランスな状態になるといわれている（秋山, 1998）。このような不安定ない状態にある中学生の時期に焦点を当てることで、不登校問題の複雑さについて扱うことができると考える。

不登校問題を扱うこれまでの研究において、生徒たちの「学校に行きたくない（学校を休みたい）」という感情が注目されている。森田（1991）は、生徒が実際の欠席数の多寡にかかわらず、学校に行きたくないと思う気持ちを、「登校回避感情」とよんでいる。森田（1991）の調査によると、登校に対して忌避的な感情をもったことがある生徒は対象者全体の約 3 分の 2 にのぼっていたが、実際に学校を欠席したことがあると回答した生徒はそのうちの 25% であった。また、日本財団（2018）の調査では、不登校とはいえないが一定期間登校していない時期があったり、心の中では学校に行きたくないと思いながらも登校している「不登校傾向」が約 33 万人おり、全中学生の約 10 人に 1 人が不登校傾向にあると推定されている。このことから、不登校として扱われていなくても、登校回避感情を抱きながら登校している生徒たちは少なくないと考えられる。

2．登校理由と欠席理由

学校を欠席する理由として想定されるものとしては、忌引き、病欠、出席停止（感染症の罹患等）、公認欠席（部活動の遠征等）などがある。これらは，社会通念上妥当とされる事由により授業に出席できない場合であり、その取り扱いについては学校の指導要録に詳細に定められている（文部科学省 HP）。

しかし、中島・原（2009）によると、登校回避感情は孤独・対人不安、気分・学校外要因、疲労・身体因、学習意欲低下、教師回避、家庭内問題といった理由から生じているとされ、いずれも学校の指導要録上で想定されている欠席理由には合致しない。そのため、これらを欠席理由として学校側に伝えることは容易ではなく、伝えたとしても受け入れられるかは曖昧である。そのため、学校側と生徒本人、家庭とで欠席理由の妥当性の基準にズレがあり、登校回避感情が生じても、生徒は本当に欠席していいのか、どう周囲を納得させるか悩む過程があると考えられる。

中学生の登校理由について扱った先行研究（五十嵐・茅野 , 2018; 本間 , 2000; 撫尾・加藤 , 2011; 櫻井 , 2011）を整理したところ、中学生の登校理由は Table 1 のように積極的理由（学校魅力）と消極的理由（規範意識、外的圧力、学習進度への不安、周囲の反応への不安）に分類された。中島・原（2009）の研究を踏まえれば、登校回避感情をもちながらも登校する理由には、「消極的理由」が該当するといえる。しかしこれらはあくまで一般的な登校理由を列挙したものであり、登校回避感情を抱いた上での登校理由には限定されていない。

本間（2000）は、学校魅力が欠席願望を抑制し登校に結びつくとしているが、その一方で欠席願望の抑制と欠席そのものの抑制を分けて考えることの必要性を指摘している。中学生が登校回避感情を抱いてもなお欠席せず登校し続ける行動の背景について検討することは、中学生の置かれている状況についての生徒自身の認識を理解し、不登校や不登校傾向の増加の背景を知る手がかりを提供することができると考える。

3．本研究の目的

登校回避感情を抱きながらも登校している生徒は多

く、登校回避感情が生じてから実際に登校するまでには、様々な要因が複合的かつ段階的に関わっていることが想定される。そこで本研究では、大学生を対象に中学時代を回顧してもらう形で、中学生が登校回避感情を抱いてから登校／欠席するまでの過程とそれに関わる諸要因について明らかにすることを目的とする。

研究Ⅰでは、質問紙調査により登校回避感情を抱きながらも登校する理由を探索的に調査し、登校行動の背景の全体像を把握することを試みる。研究Ⅱでは、登校回避感情が生じてから登校／欠席するまでの行動や心理の流れと、それに影響すると考えられる要因をそれぞれ整理し、中学生の行動・心理とその背景要因との影響関係を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．研究Ⅰ

1．目的

中学生が登校回避感情を抱いてから登校／欠席するまでに関連する背景要因と、欠席する理由の妥当性や判断基準についての考え方を、中学生時代を回顧してもらう形で明らかにすることを目的とした。

2．方法

（1）対象者

地方公立大学の大学生184名に質問紙を配布し、回答不備を除く176名（男性60名、女性114名、その他2名）を分析対象とした。

（2）手続き

2021年5月中旬に質問紙調査を実施した。心理学関連の講義終了後に質問紙を配布し、回答後その場で回収した。本研究への参加は強制されるものではないこと、調査で知り得た情報は論文作成の資料としてのみ利用し、個人が特定されないことを口頭で説明し、質問紙の表紙に明記した。

（3）調査内容

①基本属性（年齢、性別、学年、所属学部）

②中学生時代を回顧し、1）登校回避感情が生じた際の登校経験の有無、登校回避感情が生じた理由、登校経験「あり」には登校理由、「なし」には「欠席した際に気になったこと」について、2）登校回避感情が生じた際の欠席経験の有無、登校回避感情が生じた理由、「あり」には欠席理由、「なし」には欠席しなかった理由について自由記述を求めた。

この他、③中学生時代を回顧し、学校欠席の主な理由9項目（冠婚葬祭、体調不良など）についての学校・周囲および自分の許容度、④自意識尺度（菅原，1984）について回答を求め、最後に面接調査協力承諾の可否・氏名・連絡先の記載を求めた。なお、本論文では調査内容③④の結果については省略する。

Table 2　対象者の登校／欠席行動の経験の有無

		登校回避感情が生じた際の登校経験		
		あり	なし	合計
登校回避感情が生じた際の欠席経験	あり	A 58 (-33.00%))	1 (-0.50%) B	59 (-33.50%)
	なし	C 93 (-52.80%)	24 (-13.70%) D	117 (-66.50%)
	合計	151 (-85.80%)	25 (-14.20%)	176 (100%)

3．結果

（1）登校回避感情が生じた際の登校／欠席経験の有無

登校回避感情が生じた際の欠席経験「あり」が33.5%であるのに対し、登校経験「あり」が85.8%と非常に多かった。登校回避感情が生じた際の登校経験の有無と欠席経験の有無を組み合わせ、対象者をA、B、C、Dの4グループに分類した結果、Cグループ（登校回避感情が生じたけれど、それによって欠席した経験はない）が52.8%で最も多かった（Table 2）。

（2）登校回避感情が生じた理由

登校回避感情が生じた理由について、理由に関する記述部分を内容ごとに抽出し分類した。その結果、〈個人内要因〉〈就学上の要因〉〈人間関係〉〈学校外要因〉〈その他〉の5カテゴリが抽出された。〈個人内要因〉は、さらに気分／体調／出来事の3つの小カテゴリで構成された。〈就学上の要因〉は、授業／課題／部活・委員会／行事・その他の4つの小カテゴリで構成された。〈人間関係〉は、同級生／先生／先輩の3つの小カテゴリで構成された。

（3）登校／欠席判断までの不安や懸念

登校回避感情が生じた際の登校経験「あり」の登校理由、「なし」の「欠席した際に気になったこと」、欠席経験「あり」の欠席理由、「なし」の「欠席しなかった理由」についての自由記述から、登校／欠席行動を判断するまでの不安や懸念に関する記述を内容ごとに分けて抽出し、分類した。その結果、〈就学上の不安〉〈周囲の反応〉〈罪悪感〉〈理由の妥当性〉〈規範意識〉〈休むことのわずらわしさ〉〈学校外要因〉〈その他〉の8

カテゴリにまとめられた。

4．考察

本研究対象者のうち、登校回避感情が生じても欠席した経験はないCグループが最も多く半数以上を占めたことから、何らかの理由で学校を欠席したいと思っても、それを理由に実際に欠席した経験はない中学生が高い割合で存在することがわかった。次に多かったのが、登校回避感情が生じた際に登校経験も欠席経験もあるAグループで、全体の33.0%であった。これにより、登校回避感情が生じてもその背景要因や状況により登校／欠席の選択が異なる可能性が示唆された。

また、登校回避感情を抱きながらも休まず登校する理由として、学校に行く積極的理由よりも、登校／欠席判断までの不安や懸念があるため登校していることが確認された。勉強の遅れに対する不安や「そもそも学校は行くもの」という規範意識によって登校していることは五十嵐･茅野（2018）らでも指摘されており、消極的な登校理由の存在を裏づける結果となった。

Ⅲ．研究Ⅱ

1．目的

登校回避感情が生じてから登校／欠席までの心理・行動のプロセスとその背景要因について、半構造化面接により明らかにすることを目的とする。

2．方法

（1）調査協力者

研究Ⅰにおいて面接調査への協力を承諾した大学生15名で、その内継続的な不登校経験のある1名と登校回避感情を抱いた経験がない1名を除く13名を分析対象とした（Table 3）。調査協力者を研究Ⅰの回答に基づいて中学校時代の登校／欠席経験を確認し、Aグループ7名（A-1～A-7）、Cグループ6名（C-1～C-6）に分類した。

（2）調査時期および場所

2021年8～9月に大学構内のプライバシーが確保できる個室で個別に実施した。

（3）手続き

面接調査開始前に協力依頼書を提示し、調査内容について説明を行った。同意書により面接調査への協力の同意を得た後、面接を開始した。面接内容は、協力者から同意を得られた場合のみ、ICレコーダーでの録音を行った。面接時間は1人あたり約30～40分だった。なお、本調査は岩手県立大学大学院社会福祉学研究科倫理審査委員会で承認を得た上で実施した（承認番号：21-04号）。

（4）調査項目

質問項目は以下の通りである。

①研究Ⅰでの質問紙の回答内容の確認

②登校回避感情が生じた際の欠席経験（エピソード内容／登校回避感情が生じた理由／欠席した時に気になったこと／学校への欠席連絡時の連絡手段と欠席理由）

③登校回避感情が生じた際の登校経験（エピソード内容／登校回避感情が生じた理由／欠席しなかった理由）

④学校を欠席することについての考え　1）登校規範意識（学校を欠席してはいけないと思うか／そう思い始めた時期／学校は欠席してはいけないと思う理由／欠席が認められる条件）、2）欠席理由の妥当性の基準（欠席しやすい理由／欠席しにくい理由／欠席するか否かの判断理由）、3）欠席しにくさの軽減方法

なお、Cグループは学校に行きたくないと思った際の欠席経験がないため、①③④についてのみ質問した。

Table 3　対象者のプロフィール

ケース番号	性別	年齢	中学校の規模※	所属していた部活動
A-1	女性	18	大規模	個人文化部
A-2	女性	18	小規模	団体文化部
A-3	女性	18	小規模	個人運動部
A-4	女性	18	小規模	団体運動部
A-5	女性	20	大規模	団体文化部
A-6	女性	20	小規模	団体運動部
A-7	女性	20	大規模	団体文化部
C-1	女性	21	大規模	団体文化部
C-2	女性	18	小規模	個人運動部
C-3	女性	20	小規模	個人運動部
C-4	女性	20	大規模	団体文化部
C-5	女性	21	小規模	個人運動部
C-6	女性	20	中規模	団体文化部

※中学校の規模は対象者の判断に基づく。

Table 4　本論文での記号の示す内容

記号	記号の示す内容
「　」	対象者の語り
〈　〉	行動・心理プロセスの構成要素
〔　〕	行動・心理プロセスの段階
【　】	行動・心理プロセスのうち必須通過点
『　』	行動・心理プロセスの背景要因

Table 5　A グループの学校欠席への不安や懸念

カテゴリ	小カテゴリ	語りの例
就学上の不安	自分が遅れを取る / 他人に迷惑をかける / 成績・内申点	勉強に遅れるから / テストがあるから / 内申点が下がるから
周囲の反応	同級生 / 先生 / 家族	ズル休みだと思われるから / 休むと陰口を言われるから
罪悪感		友達も頑張って登校しているから
理由の妥当性		体調を崩しているわけではないから
規範意識	規範意識 / 習慣	学校を休むのはいけないことだから
休むことの煩わしさ		行かないともっと大変になるから / 次から行きづらいから
不登校への不安		1 回休んでしまったらクセになってしまいそう
責任を果たさなかった場合の影響への不安		部長などの責任があったから
その他		意地 / 休んでも現状は変わらないから

3．分析の手順

複線径路・等至性モデル（TEM）を援用してデータの分析を行った。TEM とは、個々人がそれぞれ多様な径路をたどったとしても、等しく到達するポイント（等至点）があるという考え方を基本とし、人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みである（荒川・安田・サトウ，2012）。TEM では、歴史的・文化的・社会的に埋め込まれた時空の制約によってある定常状態に等しく辿り着くポイントである等至点や、径路が発生・分岐するポイントである分岐点を定める。本研究では、登校を等至点、欠席を両極化した等至点、登校回避感情の生起を必須通過点とし、経路の分岐点を探った。

なお、TEM では対象者の辿るプロセスに影響する社会文化的要素について、等至点に向かうように働く力を「社会的方向づけ」、両極化した等至点に向かうように働く力を「社会的助勢」として捉える。しかしながら本研究ではそれらの要素がプロセスに与える影響の方向や要素間の関係について十分検討できていない。そのため、本研究ではプロセスに影響する要素について「背景要因」として位置づけるに留めることとする。

（1）逐語録への変換

IC レコーダーで記録した音声データを逐語録として書き起こした。(2) 以降は A グループと C グループ別々に分析した。

（2）要素抽出

対象者ごとに①登校回避感情が生じてから登校／欠席までの行動・心理についての語りと、②その行動や心理に影響していると考えられる背景要因についての語りを抽出し、ラベリングを行った。

(3) ラベルの配置：抽出しラベリングされた語りを時系列に並べた。

（4）カテゴリ生成

対象者ごとに時系列に並べた語りのラベルをプロセスの段階ごとにまとめ、(2) ①のラベル、(2) ②のラベルについて、それぞれの類似性や関連性を検討して分類整理し、カテゴリを生成した。

（5）対象者ごとのプロセスの図式化

(4) で作成したカテゴリを用いて、対象者ごとに登校回避感情が生じて（必須通過点）から登校／欠席（等至点／両極化した等至点）までのプロセスを図式化した。

（6）モデル図の生成

対象者ごとの図式を重ね、モデル図を作成した。

なお、本論文で以下使用する記号の内容は Table 4 に示す。

4．結果と考察

（1）A グループの登校／欠席までの行動・心理プロセス

A グループの対象者の登校／欠席までの行動・心理プロセスは、段階Ⅰ：登校回避感情が生じるまで、段階Ⅱ：登校回避感情が生じてから登校／欠席判断まで、段階Ⅲ登校／欠席判断から実際の登校／欠席まで、の 3 段階に分けられた（Figure 1）。

段階Ⅰ：登校回避感情が生じるまで

段階Ⅰでは、〔登校回避感情の直接的理由〕がまとめられた。これには、体調不良やストレスなどの〈個人内要因〉、登校途中に忘れ物に気づいた、課題が終わっていない、委員会の仕事が苦痛、などの〈就学上の要因〉、クラスメイトや部活でのいざこざなどの〈人間関係〉があげられた。

段階Ⅱ：登校回避感情が生じてから登校／欠席判断まで

登校回避感情が生じた後、〔学校欠席への不安や懸

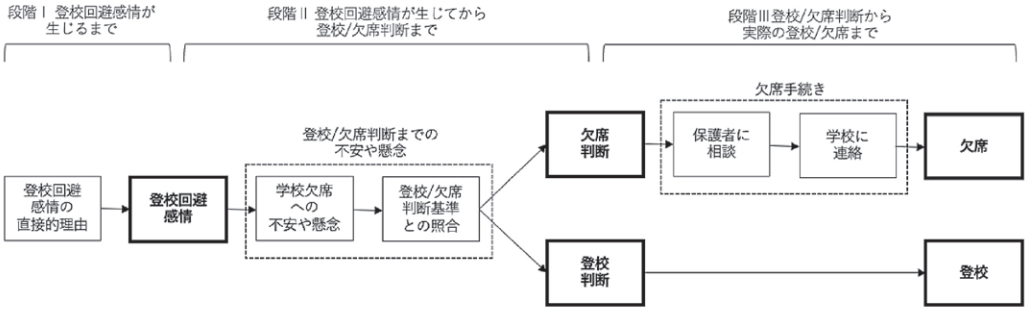

Figure 1　A グループの登校／欠席までの行動・心理プロセス

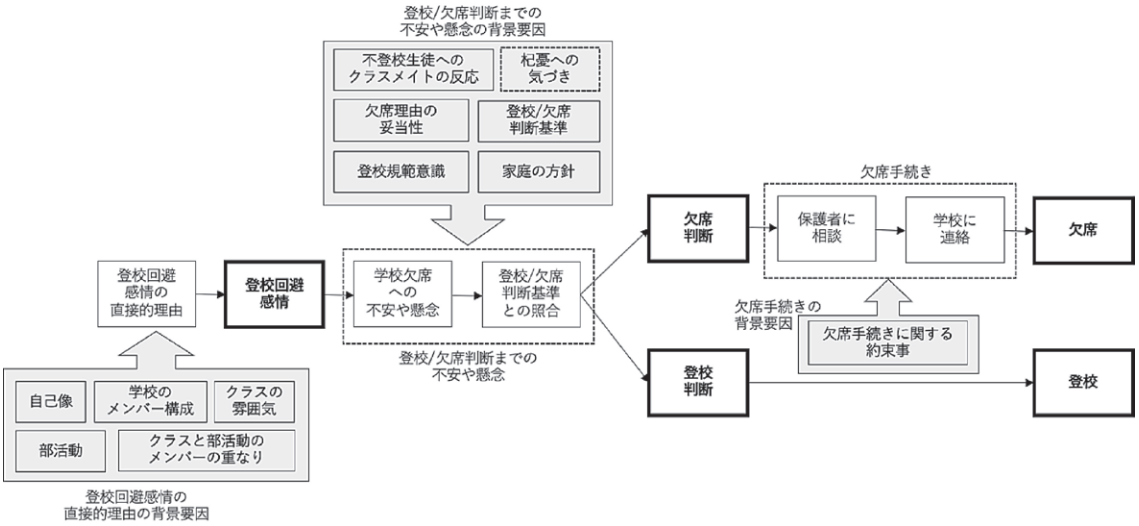

Figure 2　A グループの登校／欠席までの行動・心理プロセスとそれに関わる背景要因

念〕が生じている。欠席した場合に起こりうることを想像し、それでも休むか否か検討する段階である。ここでは、研究Ⅰで挙げられた〈就学上の不安〉〈周囲の反応〉といった不安や懸念に加え、「1 回休んでしまったらクセになってしまいそう」（事例 A-1）といった〈不登校への不安〉、行事などで〈責任を果たさなかった場合の影響への不安〉の語りがみられた（Table 5）。

〔学校欠席への不安や懸念〕について一通り検討したあと、実際に欠席するか否かの判断へと進む。不安や懸念はあるとしても、それを踏まえて〔登校／欠席判断基準との照合〕をして最終的な判断を行っていた。判断基準には、本人なりの〈精神的な限界ライン〉と、授業内容や行事の有無などの〈外的条件〉とがあった。

段階Ⅲ：登校／欠席判断から実際の登校／欠席まで

欠席判断の後、欠席の手続きに進むが、その際、〔保護者に相談〕する過程がある。学校への連絡は保護者からの連絡が必須であり、欠席するためには保護者からの承認が必要となる。学校を休む理由の保護者への伝え方には、学校を休みたい理由を正直に伝える場合（事例 A-2、3、4）と、「とりあえず体調不良」といった仮の理由を伝える場合（事例 A-1、5、6、7）とに二分された。このように、自身の欠席判断の後、保護者に納得してもらえるよう思案していることがわかる。保護者が学校を休んではいけないという規範意識が高かったり、欠席の妥当な理由を持ち合わせていない場合には、〔保護者に相談〕という手続きが一つのハードルなのではないだろうか。今回の調査では保護者の承認が得られなかった事例はなかったが、「とりあえず体調不良」という仮の理由を伝えていた事例では、保護者に反対されたり保護者を納得させなければならないという煩わしさがあったと推測される。

学校欠席について保護者の承認を得た後、〔学校に連絡〕という段階に進む。対象者が保護者に仮の欠席理由を伝えていた場合は保護者はそのまま学校に伝えていたが、対象者が正直に保護者に欠席理由を伝えていた場合でも、保護者が学校に「体調不良で休む」と伝えている場合が多かった。「体調不良」は学校を休む理由として妥当と考えられ、詳細な説明も求められ

Table 6　Aグループおける登校回避感情の直接的理由の背景要因

カテゴリ	語りの例
自己像	自分は完璧主義だった／グループなどには属さず一人でいた
学校のメンバー構成	派閥があった／ある程度関係性ができている状態でのスタートだった
クラスの雰囲気	小グループがあって、噂話とかすぐ広がっちゃうような感じ／一部の人以外は親切で、優しかった
部活動	全国大会を目指すような熱い部活だった／部活が忙しすぎて休みがほしかった
クラスと部活動のメンバーの重なり	部活で自分と反対の派閥にいた人が同じクラスだったので気まずかった／仲が良くない子と喋りたくないが、クラスも部活も一緒で家も近いから関係は切れない

ないことから、用いられることが多いと考えられる。

（2）A グループの登校／欠席までの行動・心理プロセスに関わる背景要因

登校回避感情が生じてから登校／欠席までのプロセスに関わる要因として抽出された語りをまとめたところ、①登校回避感情の直接的理由の背景要因、②登校／欠席判断までの不安や懸念の背景要因、③欠席手続きの背景要因にまとめられた。これらを Figure 1 に加えると、Figure 2 のようになる。

①登校回避感情の直接的理由の背景要因

登校回避感情の直接的理由の背景要因として、『自己像』『学校のメンバー構成』『クラスの雰囲気』『部活動』という 4 つのカテゴリにまとめられた（Table 6）。

『自己像』は、対象者自身によって語られた対象者自身の性格や人間関係の築き方に関連する内容である。例えば、「完璧主義で周囲からも悪いイメージは持たれていないからこそ、課題が終わっていない状態では登校できない」（事例 A-2）などの語りが見られた。『学校のメンバー構成』は、対象者の通っていた中学校の生徒の構成がどういった小学校から集まってきているかに関連するものである。例えば、「ある程度関係性ができている状態でのスタートだった」（事例 A-5）という語りからもわかるように、小規模校出身者と大規模校出身者が一つの中学校に統合される場合、大規模校出身者は中学校生活のスタート時点から既知の友人が多いが、小規模校出身者は友人が少なく居場所探しに苦労している様子がうかがえる。

『クラスの雰囲気』は、所属クラスの雰囲気に関連する内容である。学校生活の中で多くの時間を過ごすクラスの雰囲気は、その人の学校生活全体の評価につながると考えられる。「小グループがあって、噂話とかすぐ広がっちゃうような感じ」（事例 A-6）のように、自分にとって居心地の悪い雰囲気のクラスで生活し続けることは強いストレスであり、登校回避感情が生じる理由として前面に出てきやすいと考えられる。

『部活動』は、所属部活の雰囲気や活動内容である。ほとんどの対象者から聞かれ、その多くは休みがないという部活動の過酷さについての語りであった。休みがない日々が続くことにより、体力的にも精神的にも疲弊しながら毎日過ごしていたという。

また、部活動のメンバーとクラスのメンバーが共通していることについても多く語られていたため、『クラスと部活動のメンバーの重なり』とした。部活動でこじれた人間関係がクラスにも持ち込まれるため、学校生活全体の人間関係がこじれる結果になる。さらに、部活動の顧問が普段の学校生活の指導も行うことが多く、学校生活の窮屈さを生み出している可能性がある。

Table 7　Aグループおける登校／欠席判断までの不安や懸念の背景要因

カテゴリ	語りの例
不登校生徒に対するクラスメイトの反応	（不登校生徒が）なんで来ないんだとかずるいとか悪口を言われていた／何してるんだろう、どうしてるんだろうってちょっと不思議がる感じ
家庭の方針	休みたいときは休んでいいよ、みたいに自由にしてくれる家庭／学校は行くもんだと言われていた
欠席理由の妥当性	学校が休みなさいと言っていること（インフルエンザや忌引きなど）だったら休みやすい／骨折や忌引きなど目に見えるものだと休みやすい
登校規範意識	学校は休んじゃいけない／義務教育だし、休んでも卒業できる
登校／欠席判断基準	通常授業かどうか／その時の病み具合と元気度
杞憂への気づき	（欠席の後、学校に）登校してみたら案外楽しかったり、心配していたような事が起こらなかった／一度休んだことで、休む・逃げるという道もあることを知った

②〔登校／欠席判断までの不安や懸念〕の背景要因

A グループの対象者の〔登校／欠席判断までの不安や懸念〕の背景要因として、『クラスの不登校生徒に対するクラスメイトの反応』『家庭の方針･考え』『欠席理由の妥当性についての考え』『学校規範意識』『登校／欠席判断基準』『杞憂への気づき』という 6 カテゴリが抽出された（Table 7）。

『不登校生徒に対するクラスメイトの反応』は、他の不登校生徒に対するクラスメイトの評価を知り、自分も休んだ時に悪口を言われたり、ずる休みだと疑われるのではないかという不安である。

『家庭の方針』は、欠席することについての家庭の

方針や家族の考え方である。「学校は行くもんだと言われていた」（事例 A-7）などのように、学校欠席について厳しい家庭の場合は、生徒が保護者に休みたいと言いにくく、休んだとしても家に居づらいという。一方、欠席するか否かは生徒本人に任せている家庭であっても、「そう言われるからこそ自分の中での判断基準を明確にしないといけない」（事例 A-6）と、自分の中での基準を意識している場合もあった。

『欠席理由の妥当性』では、欠席するために妥当である明確な理由を求めるような語りが多くみられた。中には、「熱が 37.5℃ 超えたら休んでもいい」（事例 A-1）というような具体的な体温基準に言及したものも多く、自身の実際の体調や辛さというより、学校に受け入れられるかを気にしていることが読み取れる。

『登校規範意識』は、学校に登校すべきかどうかの自身の規範意識の強さである。A グループの対象者は、学校は欠席してはいけないという意識と、欠席したい時は休んでもいいという意識のどちらも合わせ持っており、自分はどう振る舞うかについて、登校回避感情が生じた都度検討作業が行われていると考えられる。

『登校／欠席判断基準』は、対象者自身が学校を欠席するか否かを判断するときに用いる内的な判断基準であり、「その時の病み具合と元気度」（事例 A-7）などの語りが含まれる。〔登校／欠席判断までの不安や懸念〕は常に存在しうるが、最終的にはその中でも内的な判断基準に基づいて判断していた。

『杞憂への気づき』は、初めての欠席行動ではなく、すでに欠席を一度経験した後の登校／欠席判断に影響していると考えられる。学校を欠席したいと思った時に最初は不安や懸念はあったものの、いざ欠席してみたところ、「（欠席の後、学校に）登校してみたら案外楽しかったり、心配していたような事が起こらなかった」（事例 A-2）、「一度休んだことで、休む・逃げるという道もあることを知った」（事例 A-4）などという語りが含まれる。欠席後どう感じたかについては、実際に欠席経験のある A グループの対象者ならではの語りであり、欠席経験の後は休むことに対するハードルが下がると考えられる。

③欠席手続きの背景要因

欠席したいことを〔保護者に相談〕し、承認を得て

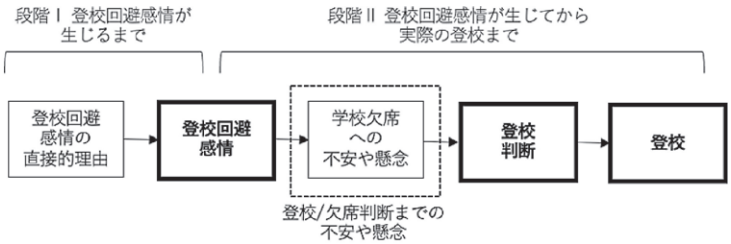

Figure 3　C グループの登校までの行動・心理プロセス

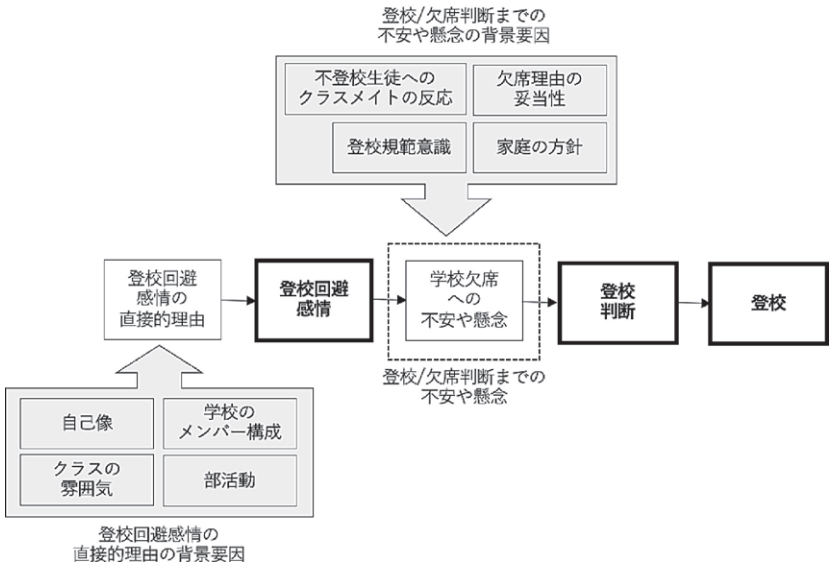

Figure 4　C グループの登校までの行動・心理プロセスとそれに関わる背景要因

保護者が〔学校に連絡〕するという一連の流れは欠席手続きとしてあり、その背景として保護者が学校に欠席の連絡をいれるという『欠席手続きに関する約束事』がある。これは、学校を欠席するために必要なプロセスであり、一つの大きなハードルとなると考えられる。保護者を納得させ、学校を納得させなくてはならないために、欠席の妥当な理由を考えることが必要となる。

（3）C グループの登校までの行動・心理プロセス

A グループと同様の手順で、C グループの対象者のプロセスを重ねて検討したところ、登校／欠席までの行動・心理プロセスは、段階Ⅰ：登校回避感情が生じるまで、段階Ⅱ：登校回避感情が生じてから実際の登校まで、の 2 段階に分けられた（Figure 3）。

段階Ⅰ：登校回避感情が生じるまで

〔登校回避感情の直接的理由〕は、A グループと同様に、〈個人内要因〉、〈就学上の要因〉〈人間関係〉にまとめられ、A グループとの違いはみられなかった。

段階Ⅱ：登校回避感情が生じてから実際の登校まで

登校回避感情が生じてから、対象者は A グループと同様、〔登校／欠席判断までの不安や懸念〕をもっていた。ここでは、研究Ⅰでのカテゴリ（Table 5）に加え、「私が休んだら困る人がいる」（事例 C-6）という〈責任を果たさなかった場合の影響への不安〉が見られた。C グループの場合は、〔登校／欠席判断までの不安や懸念〕の後に登校するか否か検討するプロセスがなく、登校判断へと進むのが特徴的であった。

Table 8　Cグループおける登校回避感情の直接的理由の背景要因

カテゴリ	語りの例
自己像	優等生キャラだった / クラスの上の方の人と話すのに緊張する
学校のメンバー構成	小学校からの人間関係は基本続いていく / クラスも部活も基本一緒
クラスの雰囲気	（体調不良での欠席に対して）嘘だろとか、かまってほしいだけなんじゃないの、という空気があった / 一軍・オタク・いじられキャラにハッキリと分かれていた
部活動	中学の中ではトップレベルで練習が厳しかった / 休みがない

（4）C グループの登校までの行動・心理プロセスに関わる背景要因

C グループにおいて、登校回避感情が生じてから登校するまでのプロセスに関わる要因として抽出された語りをまとめたところ、①登校回避感情の直接的理由の背景要因、②登校判断までの不安や懸念の背景要因、にまとめることができた。これらの要因を Figure3 に加えると、Figure4 のようになる。

①〔登校回避感情の直接的理由〕の背景要因

C グループの対象者の〔登校回避感情の直接的理由〕として、4 カテゴリ『自己像』『学校のメンバー構成』『クラスの雰囲気』『部活動』にまとめられた（Table 8）。

②〔登校／欠席行動判断までの不安や懸念〕の背景要因

〔登校／欠席行動判断までの不安や懸念〕の背景要因として、4 カテゴリ『不登校生徒に対するクラスメイトの反応』『家庭の方針』『欠席理由の妥当性』『登校規範意識』にまとめられた（Table 9）。

いずれも A グループで分類された内容とほぼ同様であるが、C グループが A グループと異なるのは、『欠席理由の妥当性』について「憂うつである」（事例 C-2）「気分が乗らない」（事例 C-3）といった内面的な問題を理由に欠席することへの抵抗感がうかがえることである。また、『登校規範意識』については、C グループの 6 人全員が「学校を休んではいけない」という規範意識を持っていた。また、「学校に行ったら部活も行かなきゃいけない」（事例 C-2）、「部活だけでなく勉強や他の活動もちゃんとやらないと」（事例 C-6）というように、学校に一度登校したら学校での活動全てに参加する必要があるという規範意識もみられた。

Ⅳ．総合的考察

本研究において、対象者の半数以上が中学生の時に登校回避感情を抱きながらも登校するという経験をしていた。登校してさえいれば一見何の問題もないように思われがちだが、その登校理由は消極的なものがほとんどで、登校／欠席判断までの間にさまざまな不安や懸念があることが浮き彫りになった。

Table 9　Cグループおける登校判断までの不安や懸念の背景要因

カテゴリ	語りの例
不登校生徒に対するクラスメイトの反応	絶対来てほしいわけではないが、来たら歓迎
家庭の方針	休むことに対してすごく厳しいというほどではない / 全然厳しくない
欠席理由の妥当性	気分で休むのはちょっとなぁと思う / このくらいじゃ休めない
登校規範意識	学校は休んではいけない / 学校を休んでは絶対ダメなんだ

（1）登校回避感情が生じてから登校／欠席までの過程

登校回避感情が生じてから実際に登校／欠席するまでには、段階Ⅰ：登校回避感情が生じるまで、段階Ⅱ：登校回避感情が生じてから登校／欠席判断まで、段階Ⅲ：登校／欠席判断から登校／欠席まで、の３段階（Cグループの場合は２段階）があった。従来の研究は段階Ⅰでの登校回避感情の直接的理由に着目したものがほとんどであったが、本研究では、段階Ⅱにおいて学業のみならず、欠席理由の妥当性や周囲への影響、罪悪感など、様々な不安や懸念を抱え、特にAグループでは最終的に自らの判断基準と照合させた上で登校／欠席判断の作業を行っていたことが明らかとなった。

さらにAグループにおいて、欠席判断した後に、保護者の承諾をとり学校に受け入れられる理由をつけて欠席手続きをとっており、この一連の手続きが欠席までのハードルとなっていることもわかった。このことから、家庭の方針（保護者の登校規範意識）も深く関わっていることが示唆された。一方、Cグループのように、生徒自身の登校規範意識が高い場合には、自らの判断基準との照合作業はなかった。

（2）登校回避感情や登校／欠席判断までの不安・懸念の背景要因

登校回避感情が生じる直接的理由や登校／欠席判断までの不安や懸念、欠席するまでの手続きには、それぞれに背景要因があることも明らかになった。

特に登校回避感情の背景として特徴的だったのは、「求められる完璧さ」といった『自己像』である。「課題が終わっていないから学校に行きたくない」（事例A-2）、「学校に行くなら授業も部活もちゃんと参加しなくてはいけない」（事例C-2）という語りから、学校生活において常に完璧さが求められていることがうかがえる。登校時は常に完璧な状態でいることが求められ、少しでも欠けると怠慢な生徒だと見られたりしてしまう窮屈さが読み取れる。

また、『クラスと部活動のメンバーの重なり』にみられるように人間関係が場面を超えて連続していることも登校回避感情や登校／欠席判断までの不安や懸念の背景としてみられた。普段の授業や委員会活動、部活動など、学校の中でも様々なコミュニティが存在するが、それぞれのコミュニティの構成メンバーが重なっているため、一つのコミュニティで人間関係につまずいてしまうと、学校生活全体の人間関係に不調和が生じる様子がみられた。このような傾向は特に小規模校の場合に特徴的であった。学校が小規模校であるほど、部活やクラスなど学校の中でメンバーが重複することが多く、人間関係の切り替えの難しさがみられた。

（3）登校規範意識の強さと欠席への過剰な不安

Aグループの対象者は、「学校には登校しなくてはいけない」という意識と「無理して登校しなくてもいい」という意識の、どちらも持っているケースが多かった。それに対しCグループの対象者は、全員が「学校は休んではいけない」「学校に行くのが当然」といった強い登校規範意識を持っていた。また、登校規範意識が強いために、欠席すると周囲からどう思われるかを気にしたり、次の日に欠席理由を先生から問われることを苦痛に感じたりしていることも明らかになった。無理してまで登校する必要はないと理解していても、欠席することはよほど深刻なことであり、それなりの理由があると思われてしまう。そのため、欠席理由を詮索されることを不快に思い、ズル休みと思われることに罪悪感を抱いていた。

欠席による不利益が、欠席した本人だけで完結しないことも明らかになった。欠席すると次の日にやらなくてはいけないタスクが増えることや、欠席することで部活や委員会などの他のメンバーに迷惑をかけることを懸念している様子が多く見受けられた。学校では集団として連帯して活動することが多く、欠席は次の日以降の自分や周囲の人にも影響をおよぼすとされ、責任を感じる場面が多いことが読み取れる。

（4）登校／欠席の判断基準とその基準との照合作業

学校には毎日登校しなくてはならず、正当な理由がなければ欠席は認められないということは両グループに共通にみられた。特に「気分がのらない」といった精神的不調は、生徒本人しか感じることのできない主観であることから、欠席理由の妥当性を説明・判断することが難しく、そのことを訴える作業そのものが大きな負担になっていると考えられる。実際、「欠席するほうが煩わしいから、とりあえず学校に行く」（事例C-5）という語りからも、欠席自体の難しさが伺える。

登校／欠席の判断基準との照合作業はAグループにのみみられた。Aグループは、自分の中に登校／欠席の判断基準があり、登校／欠席を判断する際にはその基準との照合を行っていた。それに対してCグループは、自分の中の判断基準はほとんど持ち合わせておらず、学校は欠席してはいけないという強い登校規範意識に基づいた行動をとっていることが明らかになった。

（5）欠席を経験することによる気づき

『杞憂への気づき』もＡグループにのみみられた。登校回避感情が生じた後、周囲からの詮索や周囲に迷惑をかけることに多大な不安や懸念を抱いていたが、欠席を一度経験してみるとその不安や懸念についてそれほど大事でもなかったと気づく経験をした人が複数みられた。欠席することによる不安・懸念の軽減がみられ、自身のもつ判断基準で登校／欠席を判断しやすくなったことが考えられる。一方、Ｃグループは欠席経験がないために自身の登校／欠席判断基準を持ち合わせていないと考えられるが、一度欠席経験をすることで、欠席に対する考え方に変化が生じ、自身の中の登校／欠席判断基準が新たに作られる可能性がある。

Ｖ．まとめ

中学生の中には消極的な理由により登校し続けている生徒も少なくなく，そのような場合には強く心理的な負荷がかかっていることが予想される。このような心理的負担の背景には、登校判断までに段階的に不安や懸念を検討しながら判断されていること、またそのプロセスにはそれぞれの背景要因が複雑に絡みあっていること、過剰に欠席に対して不安を抱いているケースもあることが明らかとなった。

登校回避感情の生起する要因や登校／欠席判断までの不安・懸念の背景などはＡグループとＣグループでほぼ共通していた。しかし、Ａグループは自身の登校／欠席判断基準の有無によりその判断基準との照合作業があり欠席という選択もあるのに対し、Ｃグループにはその判断基準がないために欠席するという選択肢がなかった。これらの知見は、消極的な登校理由により登校し続けている生徒の心理的負担を軽減するための支援を検討する一助となると考える。

なお、今回の対象者は全員が大学進学者であり、中学生時点とは異なる意味づけとなっている可能性がある。また、対象者数も少ないことから、本研究結果の一般化には限界がある。今回は等至点を「登校」、両極化した等至点を「欠席」としたが、半日登校や保健室登校といった登校スタイルの違いや不登校経験のような累積的な事情などについては十分検討することができなかった。今後、偏りの少ないサンプルでの調査を重ね、登校スタイルに応じて詳細に分析することにより、本研究結果の一般化を図ることが可能となると考える。

文献

秋山 弥（1998）. 小学校から中学校への移行的危機 . 会沢 勲・石川悦子・小嶋明子（編著）移行期の心理学 こころと社会のライフイベント ブレーン出版

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）.「複線経路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例 . 立命館人間科学研究 , 25, 95-107.

本間友巳（2000）. 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究 48, 32-41.

五十嵐哲也・茅野理恵（2018）. 小中学生における登校への動機づけ尺度の作成 学校心理学研究 18, 43-51.

文部科学省 HP.〔別紙 2〕中学校及び特別支援学校中学部の指導要録に記載する事項等 https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/attach/1415198.htm（2022 年 1 月 11 日）

森田洋司（1991）.「不登校」現象の社会学 学文社

中島義実・原明子（2009）. 登校回避感情の類型と，促進要因・抑制要因との関係－登校回避感情の頻度と強度，双方からの測定による類型化の試み－研究論文集－教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集－ 2, 2, 1-8.

中澤幸子・星山知之（2019）. 不登校児童生徒の支援に関する一考察 - 登校維持要因と予防的観点から -. 山梨障害児教育学研究紀要 , 13, 61-68.

日本財団（2018）. 不登校傾向にある子どもの実態調 査 https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/ information/2018/20181212-6917.html（2022 年 1 月 11 日）

櫻井裕子（2011）. 中学生が考える「学校」と「不登校に対するイメージ」について 奈良女子大学社会学論集 , 18, 181-196.

菅原健介（1984）. 自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み 心理学研究 , 53,3,184-188.

撫尾知信・加藤雅世子（2011）. 中学生における不登校傾向と登校促進動機・欠席促進動機及び不登校評価との関連 佐賀大学教育実践研究 28, 1-19.